



| | |
|--------------|---|
| Title | 共生概念の二類型 : 有用性による共生・有意味性による共生 |
| Author(s) | 八木, 景之 |
| Citation | 共生学ジャーナル. 2020, 4, p. 30-54 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/75385 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

共生概念の二類型

一有用性による共生・有意味性による共生一

八木 景之*

Two Types in the Concept of Kyosei

“Kyosei by Utility” and “Kyosei by Meaningfulness”

YAGI Kageyuki

論文要旨

異なる生き方をする二者の間に相互作用が生じている状態、すなわち共生には、二つの類型が見られる。一つは、①目的達成のために何らかの有用な資源を持つ他者を必要とし、その関係の結果として共生が成立する「有用性による共生」である。これは、生物や経済の世界で見られる生態学的な共生といえる。そしてもう一つが、②関係すること自体が目的であり、〈意味〉があると感じられるがために他者を必要とし、その結果として共生が成立する「有意味性による共生」である。これは主に深い人間関係の中で見られるだろう。本論文においては、共生概念を上記の二類型に分割することを提案したい。

キーワード 共生、意味

Abstract

In the state where two or more different actors are living together, that is *kyōsei*, we can distinguish two different types. (1) “*Kyōsei* by utility” (ecological symbiosis), on the one hand, where *kyōsei* is based on a so-called service-resource relationship and framed for fulfilling a specific purpose. This kind of ecological symbiosis is seen in the living world (also called ‘mutualism’) and the economy. (2) “*Kyōsei* by meaningfulness” (existential symbiosis), on the other hand is a kind of relation where partnership is itself the purpose; it’s meaningfulness is felt by the individual, so it requires a partner, as a result of which *kyōsei* is established. This type of *kyōsei* is mainly found in profound human relationships and is shaped independently of resources. In this paper, I would like to propose a new classification of the *kyōsei* concept based on these two ideal types.

Keywords: *kyōsei*, symbiosis, meaningfulness

* 大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 ; kyagi1988@gmail.com

1.はじめに

生態学および仏教哲学にその源流を持つ共生概念は、主に 1970 年代より社会科学の分野においても注目を集め、今日に至っては学問以外の世界においても盛んに活用されるようになった。

しかしそうした一定の歴史を持っているにもかかわらず、共生概念の意味内容には幅があり、明確に定義されているとは言い難い。定義のゆるやかな概念は、武谷 (2017:23) が指摘するように、その中での多様な議論が許される一方、学術用語として使用することの難しさが問題となる。

ある論者は、二者が手を取り合って親しく語り合う性質の関係が共生であると述べるだろう。しかし別の論者は、はげしい闘争が含まれる関係を共生に含むかもしれない。あるいは、共生論における有力な考え方として、共生とは対等な関係を伴うべきである、といった意見がある。しかし一方、権力構造において明らかに対等ではないにもかかわらず、その中で共生が実現しているように見える人間集団が存在する。

また、これまでの議論においては、しばしば生態学における共生概念 (=symbiosis) が援用されるが、その生態学においても、地衣類 (藻類と菌類の共生体) のように、美しく多様な関係を獲得している相利共生、すなわち双方に利益のある共生関係はもちろん、寄生バチと宿主の関係のように、進化における軍拡競争の結果、きわめて巧みなやり方で、ある生き物が別の生き物を搾取する状態に至った関係もまた、共生であるとされている。

共生概念の中には、全く異なる性質が同居しているように見える。「良い」関係と「悪い」関係が含まれているように見えるのである。

ところで、こうした多様な意味合いを含む共生概念ではあるが、善悪を越えた⁽¹⁾ ところにある最も広い意味合いにおいて共生概念を捉えようとするならば、「異なる生き方をする二者の間に、相互作用が生じている状態」といった定義を取り出すことができる。なぜなら、共生が「ともに生きる」ことを意味するのであれば、二者が、ただ同じ時間に存在するだけでなく、そこには何らかの相互作用が必要であると考えうるからである。

本論文においては、この広義の共生概念における相互作用の性質をもとに、共生概念の類型化を行い、概念整理への貢献を試みたい。

| 段階 | 類型 | 代表例 |
|----|-----------|---------------------|
| ① | 有用性による共生 | 生物どうしの共生 経済的分業関係 |
| ② | 有意味性による共生 | 友人との共生 死者との共生 |

図 1-1. 共生概念の二類型

この二類型において、まず第一には「資源を獲得するための」共生関係が存在する。これは、生物や経済の世界で見られる生態学的あるいは分業論的な共生関係である。すなわち、生存や利益獲得といった何らかの目的を達成するために、他者が持つ有用な資源を必要とし、その結果として共生が成立する「①有用性による共生」である。

そして第二に、「資源の獲得とは無関係に成立する」ように見える共生関係が存在する。この関係は、主に深い人間関係の中で見られるだろう。すなわち、その関係自体に〈意味²⁾〉を感じるがゆえに他者を必要とし、その結果として共生が成立する「②有意味性による共生」である。

これらは、哲学における伝統的な問いによって、経験的に分類することができる。すなわち、「それは、それ自体のためであるか？」といった単純な問いである。①の関係は、何らかの目的のために「消費」され、関係すること自体は目的ではない。しかし②は、関係のための関係であり、ある瞬間における1つのテレイオン（完成物）である。この観点からすれば、本研究はこの問いと共生概念を単純に結びつけたにすぎない。

また、②の性質の共生は、①とは異なる「人間的」な関係である。人間は、しばしば②の関係を通して自己実現をおこない、すなわち自分自身になる。たしかに人間は、①によって外部から資源を獲得し命をつないでゆく有機体の一種にすぎない。しかしそうした人間観からは、②が存在することの必然性を導き出すことは困難である。したがって②の共生は、人間の特殊性を映し出す、人間科学の対象となりうる共生の類型である。

本論文では、この共生の二類型を主役として共生概念を論じたい。論文構成としては、共生論における先行研究に触れ（第2章）、筆者の主張する「共

生の二類型」について、その妥当性を説明したい（第3章）。また本論文においては、共生現象に伴って生じる〈意味〉なる現象を重要概念として取り扱うが、この用語の説明および定義を、美学における議論を援用しつつ、補足として行いたい（第4章）。

2. 先行研究

共生概念の源流

生態学における共生概念は、微生物学者であるアントン・ド・ベイリーが1879年に発表した『共生の現象』（Die Erscheinung der Symbiose）によるものが初出である。この論文における共生概念は、「異なる生物が共に生活する」ことを広く表現するものであり、寄生や着生といった「不公平な」関係までもが共生に含まれている。また、その後の生態学においては、共生概念をやや狭く捉え、「安定した閉鎖系における相利共生」を共生として捉える立場が強まったが、しかし今日では、ふたたび共生概念を広く捉える立場が有力となっている（尾関 2007:19）。なぜなら、相利共生とは言っても、実際に何が利益かという判定はきわめて困難であるからだ。

たとえば捕食行為は、ある局所的な観察においては、双方に利益があるようには見えない。しかし、時間的あるいは空間的スケールを拡大して観察すれば、捕食行為自体が被捕食者の個体数の調整につながり、それが双方の種の安定につながっているケースが多く存在する。また、相利共生の関係を保っているように見えた二種の昆虫が、何らかのバランスが崩れた瞬間に捕食者と被捕食者の関係に一転する事例⁽³⁾があるが、これは、もともとは捕食-被捕食の関係であった二者が、共進化によって、相利共生関係に徐々に移行したとみられる。このような場合においては、不公平にも見えるような関係が過去に存在したことこそが、最終的には双方の生存のための利益につながっている。またさらにいえば、こうした異種間の相互作用が淘汰圧をもたらし、他者から利益を得ることのできる身体構造の「発明」に繋がっていると考えることも可能である。したがって、進化によるそれぞれの種の適応度の増大を考えると、短期的には相利には見えないような関係であっても、実際にはさまざまな関係が相利共生となりうるだろう。したがって、今

日の生態学における共生概念は、静的ではなく動的な概念であり、捕食や搾取のような関係をも含むとするイメージが強い（cf.石川 1988）。

つぎに、「共生概念の源流」のもう一方に存在する、仏教哲学における椎尾弁匡（1876-1971）の共生会（きょうせいかい）運動を紹介したい。椎尾は浄土宗の僧侶であるが、共生を「ともいき」とも呼び、一種の理想社会を目指す運動を実施した。したがってその共生概念は、生態学で用いられる共生とは異なる性質のものであり、社会不安に揺らぐ昭和前期の日本社会において、一つの精神的拠点を提供した。

椎尾は、1922年に鎌倉の光明寺において第一回「共生会」を開催し、日刊紙『共生』の発行や、運動の財団法人化（1931年）を行った。その活動は大きく広がり、日本の植民地であった朝鮮半島や台湾においても組織化がなされたが、日本の軍国主義化とともにその活動は弱まった。また、椎尾は様々な書籍を著したが、その中でも『共生講壇（1925年）』および『共生の基調（1929年）』は、共生概念を正面から捉えて論じた書籍であると言える。ここで、少し椎尾の思想に触れたい。椎尾（1929:2）は、共生とは「人間としての尊厳、真実の生活」を送ることであり、そのために人間は、様々な生命とのつながりの中で、すなわち仏教における縁起論的な立場から、「環境が自己に与えた役割」を受け止め、それを最大限に実現させることを目標とすべきであると考えた。

神谷（2000:270）によると、この椎尾の共生概念は、善導の『往生礼讃』にある「願共諸衆生 往生安楽国（衆生と共に安楽の国へ往生することを願う）」を起源とするものである。また、椎尾（1929:404）の共生思想においては、社会や国家に対する奉仕の精神が重要視されており、現代の感覚からは、やや時代遅れの印象を受けるかもしれない。しかし一方、椎尾の共生論は今日でも評価を得ており、椎尾の思想が現代社会の問題を解決しようとの立場が浄土宗の関係者に多く見られる（神谷 2000:269）。

今日における共生研究

今日の社会科学における共生研究においては、世界的な建築家であった黒川紀章（1934-2007）の『共生の思想』が一定の影響を持つ。黒川は、先に述べた椎尾の思想的な後継者とも言えるだろう。黒川は、椎尾の言葉とされる「生かし生かされる関係が『共生（ともいき）』である（黒川 1996:96）」

といった表現を引用し、共生概念を論じている。では、黒川自身の共生の思想はどのようなものだろうか。それを端的に表しているのは次の一文だろう。

共生の思想は調和、妥協、共存、混合、折衷とは本質的に異なる思想である。共生は、異質な文化、対立する二項、異質な要素、二元的対極の中に存在する〈聖域〉を認め、敬意を表明することによって可能となる。(黒川 1996:87)

共生が成立するためには、相手のアイデンティティとなりうるような、固く侵し難い領域に敬意を表することが不可欠である、といった趣旨である。しかしもちろん、こうした聖域への固執は排他性につながるものであり、こういった観点から、黒川の聖域論は批判的に説明される場合もある(尾関 2002:14)。しかし一方で黒川は、「民族の相対的個性を〈聖域〉と考える排他的な民族主義や閉鎖的な地域主義は共生の思想になじまない(黒川 1996:87)」とも主張する。また黒川は、その「聖域」と対比させ、「中間領域」なる概念を持ち出す。中間領域とは、二者の間にある「共通の理解が可能な部分」であり、どのような対立する二者も、この中間領域を持つとされる。そして中間領域の存在によって、対立を含むダイナミックで緊張感のある共生が可能になると黒川(1996:87)は主張する。黒川にとっての共生とは、「競争、対立、闘争を続けながらお互いを必要とする関係(黒川 1996:116)」であり、「流動的な多元論(黒川 1996:144)」であるといえる。

つぎに、黒川よりもさらに大きな影響力があると思われる井上達夫の共生論を取りあげたい。井上の共生概念は、以下の一文がわかりやすい。

我々の言う〈共生〉とは、異質なものに開かれた社会的結合様式である。それは内輪で仲良く共存共栄するのではなく、生の形式を異にする人々が、自由な活動と参加の機会を相互に承認し、相互の関係を積極的に築き上げてゆけるような社会的結合である。(井上ほか 1992:25)

井上は、こうした異質さの結合を可能にする共生を「会話の作法」と呼び、根元的な人間的共生の作法であるとした(井上 1986:256)。そして、対立を恐れて閉鎖的になることなく、多様な個性を尊重した上で異質な外部の攪

乱要因を取り入れ、場合によっては競争を重ねてゆくことが重要であると考える（井上ほか 1992:25）。こうした考えに対して、競争状態を好まない論者の中には、それを病的状態であるとみなす考え方もあるだろう。しかし井上ほか（1992:26）は、それを「健康な社会の生理として捉え直す」べきであると考えている。

つぎに、尾関周二の共生論を取り上げたい。尾関（2002:12）は、現代日本の共生思想を3つに分類しており、黒川紀章の聖域的共生論、井上達夫の競争的共生論、そして自身の共同的共生論が存在すると主張する。

尾関によると、黒川の共生論は保守的かつ排他的であるために前近代的であり、また井上の共生論は、競争原理が内包されることから、弱者への配慮にかけるとする。そして、配分的正義の観点から、弱者と強者の実質的平等の追求が共生の成立には不可欠であり、弱者の連帯による共同性に基づいた「共同的共生」が重要であるとの見解を示している。

また尾関（2016:5）は、「共生」という用語の欺瞞を暴露し、力関係における対等性をはかることが重要であると考えている。今日における共生概念は、政策用語として使用されるなど、社会におけるマジョリティが活用する便利な言葉にもなった。しかし共生論において多くの論者が指摘するように、共生概念は、抑圧のための道具にもなりかねないのである。

ここまでにおいて、現代の共生論に一定の影響力を持ち、そして何らかの理論構築を試みた三者の共生論について、きわめて簡単にその概要を述べた。これらの考えは、主張の力点は大幅に異なるものの、共生概念に「あるべき」という一種の理想を付与している⁽⁴⁾。これは、生態学の共生概念が、あくまで「である」という事実の追求に徹していることと比較すると、対照的な性質を持つといえるだろう。

3. 共生の二類型

この章では、本論文が主張する「共生の二類型」の妥当性について説明を試みたい。冒頭の図 1-1 で述べたように、①は資源の交換であり、有用な他者とのあいだに生起する共生関係であった。そして②の関係は、二者関係の

間に〈意味〉が生じるがゆえに成立する共生関係であった。

ところで、こうした類型化に対して次のような反論を得ることができた。

- (a) ①と②の差異は重大なものではなく、類型化するに値しない
- (b) このような類型化は過去にも試みられており、新規性は無い
- (c) ①と②は現実において混在しており、類型化は不可能である

また、仮に類型が妥当であるとしても、次のような反論が存在するだろう。

- (d) ①よりも②が優れているかのように論じているが、根拠はなにか
- (e) このような類型が、一体何の役に立つのか
- (f) 意味という用語は多義的であり、定義して使用するべきである

そこで本章においては、これら反論への再反論を試みるかたちで、この二類型の妥当性について説明を試みたい。

(a) ①と②の差異は重大なものではなく、類型化するに値しない

①と②の間における差異の一つは、①は客観的観察が容易であるのに対し、②は主観的・現象学的であり、その観察手法が異なるという点にある。

①の共生現象の本質は、環境への適応を目指した資源の交換であり、これは、有機体がそれ単独では命をつなぐことができない、という切実な事情によるものである。有機体は、内部および外部環境からの自然的圧力に抵抗して生き延びなければならず、他者から資源調達を行う必要がある。そして、その相互作用は客観的な観察が可能である。また、人間の作り出す経済上の関係も同様である。たとえばある企業の生産行為に関して、原材料の供給状況や、それに伴う貨幣の運動は十分に観察できる。

それに対して②の共生現象は、第4章でも説明するように、その共生を観察する者が〈意味〉を感じた瞬間に、その観察者の心の中で現実化されるものである。したがって②はこのような特徴をもつために、現状の技術的状況においては客観的観察が困難であり、もしこれに対して観察を試みるならば、それは常に質的調査を含むものとなるはずである。このような点から、①と②には差異が存在すると主張できるだろう。

(b) このような類型化は過去にも試みられており、新規性は無い

「有用性と有意義性」を論じる文献は、過去に多く存在する。しかしこの二分法を共生概念に導入した点に、本論文の新規性が存在する。

とはいえ、本論文で主張する二類型に類似したものが全く存在しないとは言えない。たとえば、井上（2005）の論文はその最も優れた例だろう。そこで、当該文献における共生論と筆者の議論との差異を簡潔に述べたい。

井上（2005:23-24）は、共生には2つの異なった解釈モデルが存在し、それは *symbiosis* と *conviviality* であるとする。そして *symbiosis* は相互依存性によって共存する生態学的関係であり、それに対し *conviviality* は、異質な目標を追求する人々が、「社交の作法」によって、その追求のあり方を律することにより成立する社会的結合様式であるという。

井上の *symbiosis* 概念は、本論文の「①有用性による共生」と近いものを指していると考えうる。しかし、「それ以外の共生をどう捉えるか」といった点には、明確な差異がみられる。すなわち井上の *conviviality* 概念と、本論文の「②有意義性による共生」は異なるといえる。

たとえば、井上の *conviviality* 概念の特徴の一つは、人間同士の品行規範の共有が、共生を成立させるとする点にある（井上 2005:24）。したがって、井上の *conviviality* 概念には、「『人間以外』との共生」は含まれない。しかし、過去のいくつかの共生論においては、あるいは、われわれの日常生活における実感においては、共生とは、人間と人間の間だけに生じる性質のものではない。たとえば「人間と動物の共生」や「人間と死者の共生」というものが過去には論じられ、実感されてきた。そしてこれらの関係は、*symbiosis* 概念で完全に説明できるものではない。したがって、こうした「『人間』と『人間以外』の、生態学的ではない共生」は、井上の *symbiosis* 概念からも、そして *conviviality* 概念からもすっきり抜け落ちてしまう。筆者の視点では、井上の理論は精密なものではあるが、しかしその包括性には疑問が生じる。

井上と筆者の根本的差異は、その理論における着想の背景が異なることによって生じているように見える。井上の共生論は、いわゆるホブズ問題から連なる性質の政治哲学を由来とするものであるが、それに対し、筆者の共生論は美学における「関係の美しさ」に関する議論を由来として着想されたものである。したがって井上においては、異質な人々がそれぞれの自由を追求し、そしてその追求のあり様を律することにより共生が成立するとす

るが、それに対して筆者は、異質なものが調和することによって生じる〈意味〉あるいは美的有意味性が共生を生み出すと考える。したがって、井上の共生論と本論文の間には表面上の類似が見られるが、しかし根本部分はまったく異なるといえる。

また井上(2005:25)は、*symbiosis* と *conviviality* の違いについて、*symbiosis* は、(1) 閉鎖的であり、(2) 静的であり、(3) 手段的であるという。それに対し、*conviviality* は、(1) 開放的、(2) 動的、(3) 自己目的的であるという。

ここで、(3) についてはある程度妥当であるが、しかし(1)と(2)は正しいとは言えない。すなわち、*symbiosis* としての生態学的関係は、閉鎖的あるいは静的ではない。なぜなら、二種の生物の共生関係がいかにか閉鎖的な印象を与えたとしても、時間的スケールを十分に拡大すれば、そこには関係の組み換えや立ち位置の変化が頻繁に生じる、きわめて動的かつ開放的な生命の運動を確認できるからだ。共生とは、異なる二者が「生」に由来する相互作用を持つことをあらし、したがって常にそれは動的である⁽⁵⁾。*symbiosis* の性質を正確に捉えるためには、短い時間スケールではなく、地質学的時間のスケールで考察するべきだろう。

これらが、井上と筆者の主張の間における主な差異であり、また井上の共生論に対する本論文の新規性を特徴づけることができる部分でもある。

(c) ①と②は現実において混在しており、類型化は不可能である

混在しているのは事実である。人間社会において、①と②が混在していない共生関係を発見するほうが困難であろう。しかしだからといって、混在していれば類型化できない、とは言えない。たとえば、ある社会関係を論じる際に、ゲマインシャフトおよびゲゼルシャフトの類型が援用される場合がある。しかし、現実における一つの関係をとらあげて観察するならば、一見ゲマインシャフト的な血族関係においてもゲゼルシャフト的な選択的關係を見出すことは可能であろうし、またその逆もしかりである。

本論文の類型のように、混在しているものをあえて分割して純粋化する手法は、それが現実を認識する上において有用であるならば、たとえばウェーバー(1998:112-113)が理念型という用語を用いて論じたように、少なくとも社会科学においては広く認められている研究手法である。

(d) ①よりも②が優れているかのように論じているが、根拠はなにか

たとえば、①における友人関係と②における友人関係を比較した場合、「真の」友人関係は②の関係である、と多くの人々が感じるだろう。こうした点から、①よりも②が優れていると考えることも可能かもしれない。しかし、筆者が考える②の優越性の要点は、その道徳性ではなく機能性にあり、その関係の多様性や成立頻度において②は優れていると考える。

①の関係は、資源交換が可能な相手のみと成立する。したがって、資源交換が不可能である場合は、共生もまた不可能であり、その不可能である状況を乗り越えるためには、極めて長い時間がかかる。それに対して②の関係は、さまざまな境界線を軽やかに飛び越え、多様なものとの共生を可能にする。自身から遠く離れた「故郷の情景」との共生や、あるいは「想像上の人物」との共生、というものも想定されるだろうし、たとえば自身の過去の日記を見たときに感じる、「現在の自己」と「過去の自己」の共生というものの、②の共生は可能にするように思われる。

②の共生は、人間を越境者にさせる。①の共生関係ではたどり着くことが困難であった多様な場所へと人間を導き、創造的行為を行わせる。これらの点から②は、①よりも優れていると主張することができる。

(e) このような類型が、一体何の役に立つのか

まず、ありきたりの言葉で述べておくと、人間は、自分たち自身の役に立つものを正確に判定し、それを論理的に説明できるほどの知性を持っていない。今日における核心的技術のいくつかは、その初期には役に立たないものとして見なされていたし、また逆に、役に立つと過去には考えられていたものが、長期的には巨大な負の外部性を生んでいることもある。筆者の考えでは、この知性の不足を補うものの一つが、学問的直観による妥当性の判断であり、言いかえれば、その「成果」に有用性ではなく有意味性をもとめる性質の研究が持つ役割であるように思われる。

しかし、何らかの実践に寄り添わない理論は虚しい、と考えるならば、本論文における二類型が「何の役に立つのか」について、その可能性を述べることは無意味ではないだろう。この課題についてはまた別の論文で述べたいが、本論文においても手短かに説明したい。

ここで、説明のために筆者の過去の研究を例にあげたい。筆者は以前、労

働者を対象とした「職場の共同体」に関する調査を行ったことがあるが、その際に行ったインタビューにおいて、本論文の二類型で分析しうる傾向を観察することができた。その傾向とは「職場における人々の連帯の強まり」に関するものであり、すなわち「無関係」だった人々が「①有用性による共生」を通して「②有意味性による共生」に至ったケースであった。

これは、具体的には以下のような流れであり、労働経験のある人々であれば、ほとんどが一度は体験する過程であるように思われる。

過程Ⅰ：「無関係」だった二者が「①業務遂行のための」関係に変化し、

過程Ⅱ：「①業務遂行のための」関係が「②関係それ自体に〈意味〉がある」関係へと変化する。

もちろんこの過去の研究は、本論文の類型に基づいて行われたものではなく、心理学的あるいは経営学的枠組みにおいて行われたものであるが、しかしこの関係深化の過程は、以下のように、本論文の共生論の上にも位置づけることができるだろう。

| 段階 | 関係の深化 | 類型 | 関係の性質 |
|----|---|-----------|-------|
| ① |  過程Ⅰ ①から②への深化 | 無関係 - 共生 | 物理学的 |
| ② | | 有用性による共生 | 生態学的 |
| ③ | | 有意味性による共生 | 現象学的 |

図 3-1. 関係の深化⁽⁶⁾

また、こうした関係の深化のあり様は、2つのパターンで検討することができる。すなわち、①の関係が②に変化するという深化（過程Ⅰ）と、②が③に変化するという深化（過程Ⅱ）である。そして、過程Ⅰは、共通の目標が与えられることによって生じ、過程Ⅱは、遊びや信仰などに含まれる、明確な目標を持たない行為の共同実践を通して生じるように思われる。

したがって、ある二者のあいだに共生の構築を試みるならば、この段階に目配りをしてよいかもしれない。たとえば、①の段階にある二者に対して、

過程Ⅱの実践を行ったとしても、お互いの心理的距離の大きさが、その効果を減ずるかもしれない。また、すでに①の段階に至っている二者に対して、過程Ⅰの実践を行ったところで、すなわち、有用性によって共生している二者に対して、さらにお互いの資源的依存性を強める性質の何らかの目標を提供したとしても、期待されるほどの効果は発揮されないかもしれない。

本論文の二類型は、状況の分析や共生の手法を考える上において、このような観点から一定の貢献可能性を持つと筆者は考える。

(f) 意味という用語は多義的であり、定義して使用するべきである

「意味」という用語は多くの意味を持つ。たとえば古典的な社会学においては、行為を引き起こし（理解社会学）、相互作用を媒介する（シンボリック相互作用論）ものである。また言語学においては、「言葉」と「それが指示する対象」の関係が「意味」である。また、「人生の意味を探る」性質の探求もあり、これには人間性心理学やフランクフル心理学、今日においてはポジティブ心理学の領域がそうした探求を行っているだろう。

しかし本論文においては、そうした共生論の外側にある「意味」に関する膨大な先行研究を参照し、その定まらない概念の中から、何らかの定義を都合よく援用し、本論文における〈意味〉を論じたいとは考えていない。

そうではなく、共生に〈意味〉が伴うということが、疑い難い経験的事実であると認められうるならば、その事実群から帰納して得られる現象として、〈意味〉なる概念を共生論の範囲の内側において使用したいと考える。

とはいえ、「〈意味〉は共生に伴うもの」というだけでは十分な定義になるまい。また、〈意味〉が科学の対象になりえず、諸法則の外側に存在するものであるならば、②の共生は超自然的な現象となり、学問としては扱い難いものになってしまうだろう。そこで次章においては、いかなる法則によって〈意味〉が生じうるのかについて、具体的事例を交えて考察を試みたい。

4. 〈意味〉とはなにか

共生に〈意味〉が伴うのは、どのような時だろうか。たとえば、ある人物Aと人物Bの存在を想定してみよう。そして、その差異ある二者が、とも

に祭事やスポーツに興じていたとする。これは共生だと言いうるだろうが、〈意味〉はそのような時に生じるだろう。また別の例をあげると、どこかの街に目的もなく旅をし、その過程で思いもかけない出会いや対話があったとしよう。やはりそういった時にも、〈意味〉が生じるはずだ。したがって〈意味〉は、様々な行為や思索をとおして、「異なる二者が、何らかの構造の中に共に組み入れられる」時に生じているようにも見える。

ここで重要であるのは、〈意味〉は明らかに物質的に生じているものではなく、それを享受する観察者の心の中において、現象として生じているという点である。したがって、人物 A と人物 B の共生や、「わたし」と「他者」の共生に〈意味〉が生じているとしても、それは物自体としての二者の間に〈意味〉が生じているのではなく、観察者の心の中に写し取られた二者の関係において共生が実現し、そこに〈意味〉が生じるのである。

また、心の中においてそうした地位を占めるものは、人間の存在だけではない。ペットを愛する人においては、「わたし」と「動物」との共生に〈意味〉が生じるだろうし、熟練の職人においては、「わたし」と「道具」の共生⁷⁾にも〈意味〉が生じるはずだ。

さらに言えば〈意味〉は、「人間以外」と「人間以外」のあいだにも生じうるように思われる。これを共生と言いうるかどうかは別として、たとえば、草木が2つ並んでいるだけであっても、その並び方に美的な〈意味〉が見出される、ということは十分ありうる。また同様に、物質ですらない概念 A と概念 B があるとして、そのつながりに〈意味〉を発見することもできる。たとえば国家概念 A と国家概念 B のつながりによる、いわば国と国の共生による〈意味〉は十分想定しうるだろうし、あるいは研究者においては、ある法則 A と法則 B のつながりに〈意味〉を見出すこともありうるだろう。

では、〈意味〉は「全て」と「全て」の間に生じうると言えるのだろうか。しかしそうであるとする、あまりにもその対象が膨大であり、「〈意味〉とはなにか」を問うことは困難であるように思われる。

ところが、筆者が信じるところによると、こうした考察に多彩な補助線を与えてくれるものがあり、それは美学の存在である。なぜならこうした問題は、バウムガルテン以降の美学によって探求されてきた原理と極めて類似、あるいは同一であるように思われるからだ。すなわち、芸術作品とは、複数の異なる存在をつなぎ合わせて、そこに何らかの統一を与えるものであり、

そうした異質な要素の関係こそが美を生むとする原理（cf. ディドロ 1995:337）は、上述の「異なる二者が、何らかの構造の中に共に組み入れられる」ことによって〈意味〉が生じるとする原理と類似するように思われるからである。

たとえば、音楽における〈意味〉の創出を考えてみよう。何らかの音楽を楽しむ際には、ある一つの音 A をそれ単独で聴くよりも、音 A と音 B を重ねることによって生じる「和音」のほうが〈意味〉があるように聞こえる、ということは妥当であるように思われる。そしてまた、その和音が時間の流れの中で異なる和音と調和し、楽曲のように構成されると、さらにその〈意味〉は増大するし、またその楽曲が、舞台芸術と組み合わせられたり、あるいは何らかの個人的記憶と結び付けられた場合、そこにはさらに大きな〈意味〉が生じるように思われる。これと同様のことを論じたディドロ（1995:352）の表現を借りるならば、「美しい顔や美しい絵画を眺めるほうが、ただ一種類の色を眺めるよりも、強い感動を引き起こす」のである。

したがって、「美」における〈意味〉もまた、多様なものが組み合わせられることによって生じると言えるだろう。そこで以降においては、美学を援用しつつ考察をすすめたい。

〈意味〉の有機的性質

たとえば、こうした美学の援用は、異なる二者が相互作用の結果として差異を失い「同化」してしまえば、もはや〈意味〉は生じない、ということの説明に役立つように思われる。なぜなら、具体的な美的事象を思い浮かべてみればわかるように、〈意味〉が生じるためには、様々な要素が、違いを保ちつつも同

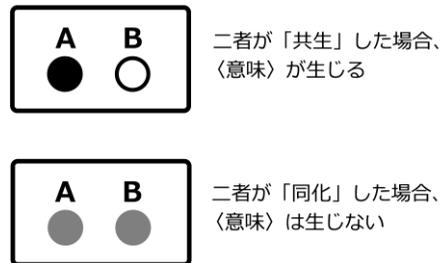


図 4-1. 〈意味〉の有機的性質

時に存在していなければならないからだ。したがって、たとえば数種類の絵の具を完全に混ぜ合わせ、その合わさった 1 つの色でキャンバスを埋めたとしても、そこに〈意味〉は生じない⁽⁸⁾。また、これは共生学の領域にも類推することができる。なぜなら、多様な個性を単一の傾向で染め上げたような

「同化」集団は、魅力的であるとは言えないからである。そうではなく、「異なる二者が、何らかの構造の中に共に組み入れられる」集団であったとしても、その構造の中で、二者がしっかりと差異を保っていれば、そこに「共生」する集団としての〈意味〉は生じるように思われる（図4-1）。

したがって〈意味〉の生成は、「多様と統一の両立」を要求する。あるいは、二者がそれぞれの独立を保ったまま統合し、その結果として、AとBを包み込む上位の構造が観察可能になるといった点から、有機的性質⁹⁾を要求するものであるとこのように思う。

つぎに、そうした〈意味〉は人間の認識のうちに生まれるものであるから、〈意味〉が生じるためには、二者の差異を理解している必要がある、といった点も重要である。なぜなら、その対象群に対する知識が不十分である場合には、そもそも二者における差異が認識できず、そこに〈意味〉は生じないからである。

たとえば筆者の経験からいえば、ある集団Aと集団Bが存在し、その二者が共生していたとしても、無知によってそのAとBの区別が困難である場合は、そこに〈意味〉は生じない。なぜなら、無知な観察者においては、そのAとBは同一のカテゴリーに属しているように思われるからであり、そこに「組み合わせ」を発見することはできず、単に同じような人々が一つのまとまりで動いているように見えるからだ。

人間は、記号化への欲求にしたがい、どのようなものであれ、それを様々なカテゴリーに分類して理解しようとする。そして、無関心な対象や軽んじている対象については、本来分かれているものであっても、同一のものであると見なし、一つの大きなカテゴリーに無造作に投げ入れる。このような場合、上記の「無知な観察者」の例で述べたように、そのカテゴリーの内部に存在する共生関係から〈意味〉を享受することはできないだろう。したがって、②の共生が実現されるためには、観察者がその対象をより深く理解することが重要なのである。

またこれも、美学的に説明することが可能である。たとえば、ある展覧会において、同じ作者による「同じ絵」が複数枚並べて飾られている場合がある。そして、この一群の絵にさほどの関心を持たず、「複数の同じ絵」として鑑賞している場合には、これに何の意図があるのか、訝しく思うこともあるかもしれない。ところが、それぞれの絵が持っている歴史や、複数枚が描

かれた事情、あるいは光の表現などの微細な描き分けによって生じる差異を認識できるならば、その複数の絵を同一の視野に収めることができていることに〈意味〉を感じるということはあるだろう。

したがって、「異なる二者が、何らかの構造の中に共に組み入れられる」ことによって〈意味〉が生じるとしても、しかしそれ以前に、その二者が、知性によって別のカテゴリーに分割されていなければ〈意味〉は生じない、ということがわかる（図4-2）。

〈意味〉の発生には、もともとは漠然とした一つの大きなカテゴリーの中にあつた二つの傾向が、徐々に分化して離れ、二者として認められるようになったあと、その「離れ」を維持したままに互いを要求し合う状況が必要となる⁽¹⁰⁾。すなわち、認識における対立の発生とその止揚が要求される。いいかえると、「ある視点からはバラバラに存在していると思われた二者が、実は、異なる視点からの観察においては繋がっていた」といった性質の感動こそが〈意味〉となり、これが「②有意味性による共生」を導き出していると筆者は主張したい。

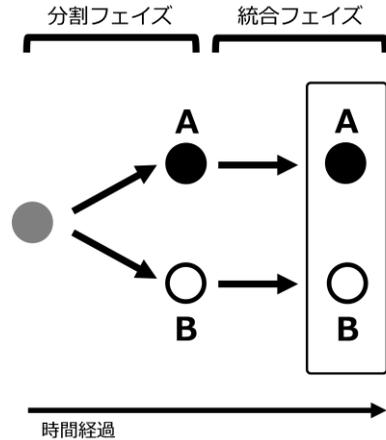


図4-2. 〈意味〉の発生

〈意味〉の定義

したがって〈意味〉とは、「諸観念の分割と再統合」が生じさせる感動であり、そうした統合を指向する一種のシステムであるといえる。また大抵の場合、「分割」は知性が行うものであるのに対し、「統合」は感性がその役割を果たすと思われる。

まったく別々の属性を持つように見えた二者が、「しかし、同じ人間である」といった認識で統合されたとき。あるいは、遠く離れているものだと感じられた二つの要素が、芸術家によって美的統合を果たしたとき。あるいは、全く異なる学問体系に属すると考えられていた二つの概念が同一の体系に

組み込まれたとき。そうしたときに〈意味〉は生じるだろう。

〈意味〉の量

つぎに、この〈意味〉には「強弱がある」という不思議が存在する。すなわち、二者の共生による〈意味〉が、強く経験される場合もあれば、そうではない場合もある。

例えば、ある地域に存在する人間集団 A と人間集団 B の共生において、その二者が激しい闘争の渦中にあつたり、宗教的あるいは政治的分断に晒されていることがわかった場合には、その困難な状況で成立している共生の〈意味〉は、かなりの大きさをもって経験される。しかし、この〈意味〉の大きさと比較すると、属性の近い「似通った」二者の共生は、当たり前であると感じられ、したがって〈意味〉は、やや少ないものであると経験されるだろう。したがって、両者の差異あるいは対立が大きければ大きいほど、その二者の共生によって生じる〈意味〉の量は大きくなるように見える。

これもまた、美学を援用して説明することができる。ここで、とりわけ関係があるように思われるシュルレアリスムの美学を取り上げたい。シュルレアリスムの精神の一つは、異質なもの同士が、論理を超えたところで統合されることによって成立する美を一つの話題とする。たとえばその第一人者であるブルトン (1992:65) は、「小川のなかを流れる歌がある」「世界は袋の中に戻る」といった文例をあげる。もちろん、小川の中を歌が流れることはないし、世界は袋の中には戻らない。したがってこれは論理的には破綻しており、この二者の関係性は矛盾する。ところが、われわれはこの関係を成立させ、そこに〈意味〉を感じ取ることができる。ではなぜこのようなことが起こりうるのか。ブルトンは、詩人ピエール・ルヴェルディの言葉であるとして、美は、「たがいにへだたった二つの現実の接近から生まれる (ブルトン 1992:37)」と主張し、「接近する二つの現実の関係が遠く、しかも適切であればあるほど (同上)」強まると述べる。すなわち、二者の関係の「遠さ」が、美の強度に影響を与えるとの考えであるが、これは上記の〈意味〉の強弱と同様の事を説明しているように思われる。

したがってこれらの共生学および美学的考察から、二者の概念的距離が大きければ大きいほど、その困難な共生が成立した際の〈意味〉が大きくなる、という法則性を見出すことができる。すなわち、概念的距離の大きさ

と〈意味〉の大きさの間には、一種の比例関係が存在する。

ところで、これらから推測できることは、〈意味〉とは量的概念であり、「光の明るさ」や「音の大きさ」と同様の、計量可能な何かであるということだ。もちろんこれは荒唐無稽な考えであるように思えるかもしれない。しかし、光や音の測定がかつてはそうであったように、〈意味〉もまた、多くの技術的な困難を伴うであろうが、やがては何らかの手法において測定することが可能であると考えられることができる。

また、こうした〈意味〉の計量化が重要であると思われるのは、〈意味〉の量的把握が、やや遠い未来における人間集団の意思決定に貢献する可能性があるという点だろう。たとえば今日においては、経済効果という指標が政策選択の際に用いられ、その多寡による判断が、さまざまな問題をはらみながらも、一定の正当性を持つと信じられている。しかし、もし〈意味〉が量的に表現されるようになるならば、それと同様に、政策 a と政策 b を比較し、その政策の実施によって生み出される〈意味〉の多寡が、判断材料になることもありうるように思われる。これは一種の功利計算的な発想であろう。筆者の考えでは、〈意味〉は超越論的現象ではなく、科学の範囲に入る可能性を持つ一種のシステムである。

〈意味〉と〈前意味〉

しかし、共生によって生じる〈意味〉が量的概念であるとする考え方は、暴力的な価値判断に繋がってしまうかもしれない。なぜなら、そこには「〈意味〉がある関係」と「〈意味〉がない関係」が生じてしまうからだ。たとえば、人間集団 A と人間集団 B の共生には〈意味〉があるが、人間集団 C と人間集団 D の共生には〈意味〉がない、といった価値判断は多くの問題を含むだろう。なぜなら、そうした価値判断は、ある一人の観察者の心の中において生じているに過ぎないからだ。したがって別の観察者は、C・D の共生に、より大きな〈意味〉を見出すかもしれない。さらにまた別の観察者は、どちらのパターンの共生にも〈意味〉を感じないかもしれない。②の共生には、こうした相対主義的な価値判断の問題がつきまとう。

しかし、ここで筆者が目じりたいのは、人間の生における貴重な一瞬においては、そうした価値判断が乗り越えられる側面が存在している点である。たとえば、当初の価値判断においては〈意味〉が無いように見えていた二者

の関係が、その関係性を深く理解する過程をとおして、新たにその関係に〈意味〉が見いだされるようになり、その結果として、二者がまさに「共生している」関係であると感じられるようになる、ということがあるように思われる。筆者はこのような経験、二者の関係における〈意味〉が無から有へと変化する経験を、高齢者住宅の音楽サークルにおける二人の老人の関係に見出したことがあり、また別の経験では、華道における二輪の花の関係に見出したことがある。

「〈意味〉がない関係」は、しばしば上記のような体験を通して、「〈意味〉がある関係」、共生という印象を与える関係に変化することがある。ところで、もしそうであるならば、「真に〈意味〉が無い関係」というものはこの世界に存在するのだろうか。

この問題は、突き詰めて考えると〈意味〉は人間が創造するものか、それとも〈意味〉はすでにあらかじめ創造されており、人間はそれを発見するにすぎないのか、という問いになるように思われる。

すなわち、人間が〈意味〉を創造するのであれば、人間が〈意味〉を感じない関係は、真に〈意味〉が無いということになる。しかし筆者の信じるところによると、〈意味〉とは、諸物と諸物の全ての関係の裏側に一種の可能性として「あらかじめ」存在しており、人間はそれを様々な行為を通して掘り出し、享受するものであるように思われる。ここで、この「〈意味〉を生む可能性」のことを、〈意味〉の前に創造され、存在していたものとして〈前意味〉と呼ぶならば、まず諸物と諸物の共生関係のなかに〈前意味〉が存在し、〈意味〉はその関係の中から選択的に取り出されるものと考えることができる（図 4-3）。

また、こうした〈意味〉の享受は、人間が進化的歴史の中で順序立てて獲得した感覚器官に依存している。すなわち主体 A と主体 B の共生によって生じる〈意味〉や、音楽や絵画の中に見いだされる〈意味〉は、聴覚や視覚の存在に依存する。しかし〈意味〉は、人間が経験しうる範囲の「外側」にも存在するので

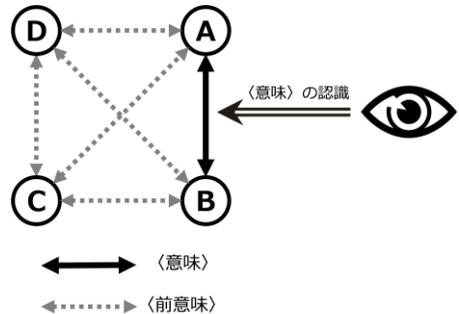


図 4-3. 〈意味〉と〈前意味〉

はないだろうか。たとえば赤外線や超音波、その他われわれが想像することもできない刺激 A と刺激 B の調和による〈意味〉というものも想定しうるだろうし、われわれのような形式ではない知的生命が、そこに〈意味〉を発見し、感動することもあるかもしれない。

おそらく人間とは、自然の持つ途方もない関係の豊かさ、〈前意味〉の膨大な豊かさから、わずかな〈意味〉だけをその小さな手で掴み取り、それを押しだくようにして生きてゆくものではないだろうか。

したがってこれらの仮説が正しければ、「真に〈意味〉が無い関係」というものは存在しない。そこには、見過ごされる膨大な〈前意味〉が存在するだけである。しかしそれは、可能態としての、いわば発芽の時を待つ〈意味〉であるといえる。おそらく、全知者なるものを想定するならば、その存在が感じるところの、関係によって生じる〈意味〉はすべて等価であるが、それに対して、人間が〈意味〉の有無や大小を経験するのは、それは人間の不完全性に由来するように思われる。

本章では、筆者の考える〈意味〉の概念を部分的に説明した。ここまで述べたように、〈意味〉は、分割と統合の連続的な流れが生み出す感動である。また、そうした〈意味〉システムは、生態学によって論じられてきた共生、すなわち資源の交換を伴う「有用性」にかかわるシステムとは一定の異なりを有する。そしてそうであるがゆえに、それぞれのシステムは、異なる性質の共生を生む。すなわち「①有用性による共生」と「②有意味性による共生」であり、この二類型が、人間における共生の現象を生み出すのである。

5. おわりに

共生概念の探求においては、第2章で述べたように、その「あるべき」状態を考えるための原理が探求されてきた。そして、本論文の主張における①の共生は、その役割を十分には果たし得ない。なぜなら、資源の交換をその性質とする①の共生は、今日の人間社会では分業という形式でその精度を高めつつあるが、しかしそこには、「あるべき」状態に向かっていると実感は不十分であるからだ。分業の進歩が諸個人の連帯感情を増大させ、理

想社会に導くとするデュルクム（1999:389）の期待は未だ実現されず、稲場（2008:4）が指摘するような今日の社会問題、すなわち社会の分断化や人間関係の希薄化を、①がすくいあげることは期待できそうにもない。

したがって、この「あるべき」を探求する際には、人間が持つもう一方の共生、すなわち②の存在を無視することはできないように思われる⁽¹¹⁾。〈意味〉のシステムは、人間に②のパターンの共生を付与し、それを愛すべきものであると感じさせる。この点から②は、共生社会の実現方法を探る上で重要な類型であると考えられることができるが、これまでの共生論において、共生現象を成立させる要因として、本論文において主張した〈意味〉や、それに類似する概念が指摘された例は存在しない。その結果として、これまでの共生論においては①と②が混同され論じられていた側面があるのではなからうか。したがって、共生概念を①と②に分割し、その性質の違いを比較して論じることは、人間社会における共生の現象をより正確に理解するうえで、一定の学問的意義を有すると言えるだろう。

注

- (1) 念を押したいが、本論文は共生概念の善悪を論じるものではなく、共生学における理論的前進の可能性をさぐる論文である。善悪については、一方には童話的・理想主義的な共生観があり、もう一方には、自由を侵害する不快なものとして共生をとらえる観点がある。筆者はそのどちらにも共感するが、しかし一方に与するつもりはない。なぜなら、両極のいずれかに偏った瞬間に、その共生論は人間の矛盾した性質、すなわち共生現象を愛しながらも嫌悪するという性質から外れ、教条的なものになりかねないからである。
- (2) 本論文における山括弧付きの〈意味〉は、共生現象を経験した人間が感じる一種の感動を表現するものである。第3章の最後で述べるように、「意味」は多義的な用語であるため、それらと差別化するためにあえて山括弧を付加した。
- (3) もっとも有名などころでは、アリとアリマキ（アブラムシ）のきわめて「ビジネスライクな」関係があてはまるだろう。一見ほほえましく見える二者の共生関係ではあるが、実際には、蜜を出さないと判定された「悪い」アリマキはすみやかにアリの餌食になり、またアリマキ側もそうした恐るべき運命を避けるために、さまざまな化学的対抗手段を持つ。
- (4) こうした議論は、たとえば人間と自然の関係を扱う環境共生学においてもなされている。「環境共生」の考え方については、上嶋ほか（2004:12-13）がわかりやすい。
- (5) 筆者の考えでは、共生は常に動的現象である。なぜなら「生」とは、与えられた限界内における完全を目指して運動し、「現在とは少し違う自己」を次の時間軸において生み出そうと試みるものだからだ。したがって複数の「生」の間にお

ける相互作用、すなわち共生現象もまた動的になる。たとえば、われわれ人間は「よく生きよう」とする衝動から様々な努力を行い、また生物種は、世代交代を通して自身の適応度の最大化を試みる。そして、そのために他者の存在を必須のものとし、その他者との闘争や調和による相互作用を通して、より完成度の高い内的構造を獲得しようとする。筆者が信じるところによると、危うげな学問でもある共生学が、他の諸学問に対して特徴づけられる可能性があるとするならば、それは共生現象というものを、単なる生態学的あるいは社会的相互作用として観察するのではなく、自己実現を目指す「生」同士の相互作用に由来するものとしてみならず、という点にあるように思われる。

- (6) もちろん、①→①→②の流れは常に生じるわけではない。たとえば何らかの美しいものを目にし、それに夢中になった場合、①がいきなり②になることもありうるだろう。あるいは、冷え切った夫婦関係に見られるように、②が①に逆戻りすることもある。また、「関係のあり方」を筆者がこのように順序付けした理由は、生命という存在の歴史が、物質→生物→知的生物（人間のような〈意味〉を運用する生物）といった順序を歩むにつれ、その「関係のあり方」もまた同様の順序で次元を上昇していると考えていることによる。すなわち、①物質的關係、①生物的關係、②〈意味〉による関係がそれらの次元に対応する関係であり、したがってこのような順序が妥当であると筆者は考えるのである。
- (7) ここで、「道具との共生」といった記述に違和感が生じるかもしれない。すなわち、本論文の「共生」の定義は、「異なる生き方をする二者の間に、相互作用が存在すること」であるため、生物ではない「道具」と「職人」の共生という記述は、矛盾しているように思えるかもしれない。しかし、当該部分で述べたように、〈意味〉による共生は、物質としての「道具」と「職人」の間に成立するものではなく、「職人の心の中に存在する道具」と「職人」のあいだにおいて生じるものであり、そして「職人の心の中に存在する道具」は一種の生命性を持つと筆者は考える。たとえば、ある職人の心の中において、その技量が未熟なころに、おぼつかない手つきで扱われていた「道具」と、数十年が経ち、熟練したその手によって振るわれる「道具」は、物質としては同一だと言えるものであったとしても、その職人の心の構造の中で「道具」が占めている地位は、その時間の流れの前後においては、全く異なるものに変化しただろう。そして、この変化のあり方は、生命をもたない物質全般に見られるような、経年変化による受動的なエントロピー（無秩序さ）の増大を伴うわけではない。生命が、より秩序化され構造化された状態に変化する（cf. ローレンツ 2005:1）傾向を持つのであれば、それに類似して、その「心の中の道具」もまた一種の生命性を持ち、職人のナラティブ（人生の物語）に適應するように、その心的構造における立ち位置を徐々に変化させるのである。こうした意味合いにおいて、筆者は「心の中の道具」は生命性を持っており、そこには職人との共生が成立していると考えるのである。こうした考え方は、たとえば図 1-1 で記載したような、あるいは他の共生論の文献にも散見される「死者との共生」といった考え方にも当てはまるものである。もちろん、こうした記述には、さらに検討が必要な部分も多い。しかし本論文はあくまで二類型の存在を主張するものであり、紙

面の限界もあるため、②の共生における現象学的性質に関しては、ここまでの記述にとどめ、後の論文においてさらに詳しく述べる予定である。

- (8) とはいえ、近現代における抽象芸術においては、ほぼ単一の色で構成される絵画も多数存在し、そこに〈意味〉があると見なされることもある。こうした性質の絵画は、キャンバスの「外側」にある異質な要素と結びつき、その間に〈意味〉が生み出される。したがってその理解のあり方はより複雑になる。
- (9) 有機体論と美学との関係は、ムーア（1973:261）の次の記述を参考にしたものである。「美しい諸対象はそれ自身、大部分は、つぎの意味で有機的統一体であるということがみてとられるべきである。その意味とは、すなわち、それらの美しい対象が、なんらかの部分の観照はそれ自身ではなんの価値も持ちえないのに、その全体の観照がその部分の観照を含んでいなければそれは価値を失うであろう、というような非常に複雑な全体である、ということである。」
- (10) この分化—統合現象については、①にも同じような傾向が見られる点が興味深い。すなわち、①における生態学的な共生を行う二者もまた、時間を遡ればもともとは一者であり、それがダーウィンの過程（cf.マイア 1994）によって、すなわち変異の創出と自然選択によって分化した後に、その分化を維持した状態で共生関係に至っている（構造的カップリング）。ここから示唆されることは、①と②の差異を強調する本論文の意図には反し、より深い視点においては、①と②は同一原因に由来するものとしてみなすこともできるかもしれない。
- (11) もちろん、〈意味〉の原理以外にも、その候補は存在するだろう。たとえば、「寛容」という言葉がその有力候補としてあがるかもしれない。しかし、寛容の原理は「あるべき」共生を実現するだろうか。筆者の観点では、寛容という言葉は、異なるものを「高尚な我慢」によって受け入れる、といった印象をうける。しかしそのような我慢をとまなうものは、原理にはなりえない。なぜなら、我慢には限界があるからである。したがって多くの場合、寛容を口にする人々も、自身が好ましいと感ずる若干の傾向に対して寛容であるだけで、様々な異質さに対して寛容であるケースは少ない。おそらく、「あるべき」共生へと向かう流れに寄与しうる原理は、我慢や義務感ではなく、〈意味〉への欲求、すなわち自身の生と自身の属する世界に〈意味〉を付与しようとする高次の欲求に基づくものになるのではないか。

参考文献

- 青山 昌文 2013『美学・芸術学研究』放送大学教育振興会。
 石川 統 1988『共生と進化—生態学的進化論』培風館。
 稲場 圭信 2008『思いやり格差が日本をダメにする～支え合う社会をつくる 8つのアプローチ』NHK 出版。
 井上 達夫 1986『共生の作法—会話としての正義』創文社。
 ——— 1999『他者への自由—公共性の哲学としてのリベラリズム』創文社。
 ——— 2005「共生の作法」『ベルリン日独センター報告集』31:23-29。

<https://www.jdzb.de/fileadmin/Redaktion/PDF/veroeffentlichungen/tagungsbaend/e/J31/05-pdf-p992-j%20Inoue.pdf> (2019/8/19 アクセス)。

- 井上 達夫・桂木 隆夫・名和田 是彦 1992『共生への冒険』毎日新聞。
- 上嶋 英機・野邑 奉弘・村田 武一郎・山口 克人・中原 紘之 2004『海と陸との環境共生学—海陸一体都市をめざして』大阪大学出版会。
- 尾関 周二 2002「共生理念の探求と現代」吉田傑俊・尾関周二・卞崇道編『「共生」思想の探求—アジアの視点から』pp.12-35、青木書店。
- 2007『「共生」概念への接近』矢口芳生・尾関周二編『共生社会システム学序説』pp.12-19、農林統計出版。
- 2016「〈共生社会〉理念の現代的意義と人類学的展望」尾関周二・矢口芳生・亀山純生・木村光伸編『共生社会〈1〉—共生社会とは何か』pp.1-25、農林統計出版。
- 神谷 正義 2000「椎尾弁匡師と共生思想」『印度學佛教學研究』49(1):269-273。
- 河森 正人・栗本 英世・志水 宏吉 2016『共生学が創る世界』大阪大学出版会。
- 黒川 紀章 1996『新共生の思想—世界の新秩序』徳間書店。
- 椎尾 弁匡 1929『共生の基調』共生会出版部。
- 武谷 嘉之 2017「共生社会論はどこへ向かうのか」宝月誠・福留和彦・武谷嘉之編『共生社会論の展開』pp.17-48、晃洋書房。
- ウェーバー、マックス 1998『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』富永祐治・折原浩・立野保男訳、岩波書店。
- ジンメル、ゲオルグ 1955『芸術哲学』斎藤栄治訳、岩波書店。
- デイドロ、ドゥニ 1995『百科全書—序論および代表項目』桑原武夫訳、岩波書店。
- デュルケム、エミール 1999『現代社会学大系 2 社会分業論』田原音和訳、青木書店。
- ブルトン、アンドレ 1992『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』巖谷國士訳、岩波書店。
- マイア、エルンスト 1994『進化論と生物哲学—進化学者の思索』八杉貞雄・新妻昭夫訳、東京化学同人。
- ムーア、ジョージ、エドワード 1973『倫理学原理』深谷昭三訳、三和書房。
- ユクスキュル、ヤーコプ＝フォン、クリサート、ゲオルク 2005『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波書店。
- ローレンツ、コンラート 2005『自然界と人間の運命』谷口茂訳、新思索社。